

想像力をもって学びと向き合おう

1. 教育を考える一言

「自己とのつながりを見出せば、学びは主体的になり鮮やかになる」

2. 背景

大学3年生の時、書店に行くとおびただしい数の英語参考書が棚に並べられており、ネットにおいても「毎日聞くだけで～」といった誇大広告を見ない日はありません。これは英語に対する過度の憧れと羨望に見えます。国際化の進展に伴い、コミュニケーションツールとしての英語需要は高まっているのは事実であるが、実際英語を日常的に使用する人の数は少数に過ぎない。この現状を踏まえると、すべての人が英語を学習する意味はなく、またそれを指導する英語教員の立場も危うくなり、自己の教員を目指すうえでのあり方を再考する契機となりました。

ある日、塾講師として指導している時、今まで英語に対して嫌悪を抱いている生徒がいつになくやる気をだして、理由を尋ねると、自分の好きな海外アーティストの歌詞の一部がききとれたからだと答えました。これは自分と英語に関してのつながりを見出したからである。その時自分なりの英語との向き合い方を見出すのが学習に現実味を与え、動機を与え続けるのだと感じました。

3. 考察

現在、英語を母語とするものは約4億人であり、中国語のそれと比べると少ないが、英語を日常で使用する機会のある第二言語話者と日本のように学校環境で学ぶ外国語話者を総計すると14億人以上である。また英語ほど広範囲で使用されている言語は他になく、英語の必要性は政治、経済、ビジネスのツールとして必需品ととらえられています。しかし同時に英語教育存廃論は古くから議論されており、その主たる主張は「卒業しても英語一通りの読解は出来ず、手紙その他の文書は綴れず、英国民との会話も出来ない」（川澄、1927）とのことであります。これは、自分の現状と受けてきた教育を振り返ってもうなずける部分は大きいです。また英語という自らが生産し続けていた日本語とは違う価値体系を反映した言語を習得することは、強い忍耐と鍛錬が必要です。このような場面で、ただやらされているからという無味乾燥な学習では効果も上がらなければ、面白味もありません。

英語を学ぶ理由は、コミュニケーションのためのというのとは否定するつもりではないが、それ以前の段階として、英語を通じて自分がどうありたいかを考えることがまず先決であるように思えます。それは、例に挙げたように、洋楽を楽しむためでもなんでも、受験の枠を超えた自己を想像するまなざしをもつことが英語に限らず、何かに取り組むうえで何より大切です。

よって教師の役割は、異なる個性をもった生徒に対し、自己の経験のみに囚われない教科との様々な向き合い方を提示し、生徒それぞれにあった学習の仕方などの方向付けをすることだと考えます。